

活発な遊びと抱っこの関連

安藤 則 夫

(つくも幼児教室)

著者は、人とのゆったりとした関わり合い（人の働きかけに対する抵抗やこだわりのない状態での関わり合い）をつくることを目指した抱っこ法の原理（情緒表出から弛緩、こだわりのないやりとりへの過程）。

Allan, 1984; Allanら, 1987) に基づいて、楽しい遊びを通じて、次第に子どもが人のもとでいい気分で落ち着くことができる方法を工夫してきた（安藤1989; Ando, 1990）。それは、「勢い抱っこ」と呼ばれる方法である。このような方法を通じて、子どもが人のもとでいい気分で落ち着けるようになれば、子どもたちは、人が提示する情報に興味を持ち、それを素直に受容し学習しやすくなる。すなわち、いい気分ですっきりするといった心の状態が、人の働きかけを受容し、学習を積み重ねていくための好条件となることがわかってきた。

自閉的な子どもや多動の子どもの場合は特に、人のもとでいい気分ですっきりできるようになることは、人に興味を持ち人から学んでいくために極めて重要なことである。しかし、社会性や言葉の面での発達に遅れがあっても、「おとなしさ」「不活発さ」が問題として存在する場合には、活発に遊ぶ面についても重視しなければならない。しかも、「おとなしさ」の特質に合わせて、どのように活発さを引き出すか、どのような活発さを引き出すか、についての配慮があった方が、子どもの発達を促す上で、よいように思われる。

今回は、発達の遅れを示した「おとなしい子ども」の今までの相談をもとに、「おとなしい」と見なされる子どもの問題点や活発さを引き出す働きかけをする上での留意点について考えてみたい。

方法：保健所で行われる月1～2回の3歳児の事後指導で相談にのった子どものうち「おとなしい」と見なされた子どもの「おとなしさ」の中に含まれる問題を分類し、問題別にどのような助言を行いどのような成果を得たかを事例を通して検討する。

子どもへの働きかけは、母親への説明・助言を著者が行い、母親が家庭で子どもに働きかける、という形で行われた。助言の基本は、「勢い抱っこ」という方法である。この方法について詳しくは、「1989年保育学会論文集」、「日本抱っこ法協会会報Vol.1.3, No.1, 1989」を見ていただきたい。簡単に説明すると、活発な

遊びと、抱っこや椅子にすわっての落ち着いた遊びを子どもの受容性に合わせて繰り返し、落ち着きのない子や自閉的な子が次第に人のそばでゆったりできるようにしていった

り、おとなしい子、ひきこもりの子が活発に自己主張できるよ

うにしていく働きかけである（図1）。この働きかけは3つの段階に分けられる。すなわち、第1段階：活発な遊びの中で

の遊びと休息の

サイクルをつく

る段階。第2段

階：活発な遊び

と落ち着いた遊

びのサイクルをつ

くる段階。第

3段階：落ち着

いた遊びの中で、

喜びと落ち着き

のサイクルをつ

くる段階、であ

る（図2）。活発な遊びをすることでその後、逆にホ

っとしやすくなるのである。

結果：(1)おとなしさの分類。今までおとなしい感じの

子どもは、①不活発な子、②不器用な子、③鈍い子、

④ひっこみ思案の子（内弁慶を含む）の4つのタイプ

に分けられた。不活発な子どもは、全体的におとなしく

何かにがんばって集中するという元気がなく、また、

声も乏しい子どもである。不活発なために人への

興味も深まらず、集中もしきれないために人からの学

習が停滞して発達の遅れが生じるものと考えられる。

不器用な子どもは、ものごと集中する気迫が乏しく

行動にまとまりがないために不器用な点が目立つ子

どもである。鈍い子は、ぼんやりした感じでおとなしく

人に集中することも弱いし行動の切り替えもうまくい

かない子どもである。ひっこみ思案の子どもは、なん

らかの不安があるか自信が乏しいために実力を発揮で

きない子どもである。

図1

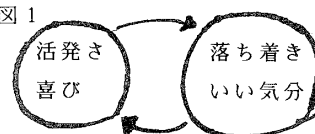
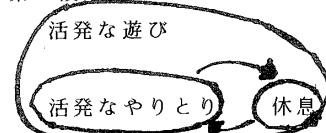
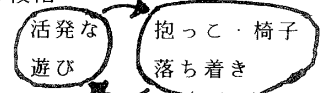


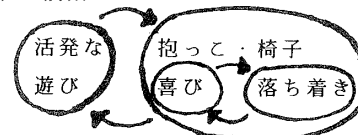
図2 第1段階



第2段階



第3段階



(2) 個別的な働きかけ。不活発な子どもに対しては、活発な遊び（くすぐり追いかけっこ）をしては抱っこで休む、を繰り返しながら全体的な活発さを増していく。特に笑いを多くし発声を増すようにする。不器用な子どもに対しては、活発な遊びを通して目標に向かってがんばる・集中する力を育てる。集中力が出来たら、集中しては、集中する方向をパッパッと切り替えられるようにしていく。鈍い子に対しては、活発な遊びをしながら、急な変化にハッとしながら対応できるようにしていく。突発的な働きかけに即応することで敏感な反応を促すのである。ひっこみ思案の子に対しては、まず家の中で活発に遊べるようにしながら、外や人のいる前でも活発に遊べるようにし、最終的に保育園のような集団の中でも活発になるように導いていく。

(3) 事例1：Y. M.（不活発な男子）初回、3歳6ヵ月。主訴、言葉のおくれ、発音不明瞭。助詞のない2語文が主。長く話そうとすると、モニャモニャと聞き取れなくなる。身振りで意志表示することも多い。理解力はそれほど遅れているとは思われないが、「おとなしい」という印象を持ち、声の出方も少ない。活発になり、積極的に人と交わり、強い表現欲求が現れれば、言葉が増えてくるものと考えられた。そこで、くすぐりや追いかけっこなどで活発さを増やすように母親に助言した。2回目には、活発に遊んでは落ち着いて絵本を読んであげる、という「勢い抱っこ」を勧めた。

初回から1ヵ月後、3ヵ月後、5ヵ月後、8ヵ月後に面接。まず、大声が出るようになり言葉数も増えてきた。5ヵ月後に3語つながるようになり、一時的に甘えが強まり発音の不明瞭さが目立つようになる。しかし、8ヵ月後には、たくましくなり、よく喋り、明瞭な発音ができるようになった。

事例2：H. O.（不器用な男子）初回、3歳7ヵ月。主訴、言葉の遅れと不明瞭。ぎこちない動きとよだれ。多少落ち着きのなさはあるが、おとなしい感じの子どもで、活発さを高めながら集中力を伸ばすことで、様々なことに挑戦し、やり通せるようになり、ひいては巧みな動きができるようになるものと考えられた。母親には、活発に動きながらも目標に気持ちを集中させる遊び（追いかけっこ）、目標に向かってがんばる遊び（目標に向かうかけっこ）、バランス運動、さらに落ち着いた時に、手先を使った遊びなどを助言した。さらに、ひとつの活動に集中できるようになったら、個々の対象に集中しながらも、てきばきと注意

の対象を切り替える遊び（ケンケンパ、ボールけり）を勧めた。ある程度、手先の活動に打ち込め、絵本など人の話をじっくり聞けるようになったら、口の動きを落ち着いたときに訓練してもらうようにした。

初回より、2ヵ月後、4ヵ月後、8ヵ月後、10ヵ月後に面接。言葉がまずはっきりしてきた。さらにがんばりが現れ、よく人に質問するようになる。さらに長い文を話せるようになり、手先の活動も徐々に器用になれるようになる。口の動きを意識するようになってよだれが減少した。

事例3：K. K.（鈍い男子）初回、3歳。主訴、赤ちゃん言葉、言葉がつかないこと。言葉の初めの音だけしか言わなかったり（おはようーお）、一語文で話していた。たたいても泣かない。母親に絵本を読んでもらいたがる。ままごと、人形には興味がなかった。おとなしく人の働きかけに敏感に反応しない。そこで、活発に遊ぶ中で集中力を育てるとともに、突然の変化にとっさに応じれるようにと助言した。つまり、追いかけっこをして、母親が隠れ、捜しにきたところをワッとおどかしては追いかけっこを続行するのである。

初回から、1ヵ月後、3ヵ月後に面接をした。言葉が急激に増え、暗い所をこわがるようになり、甘えが出てきた。3ヵ月後には、言葉がつながり、発音も明瞭になった。

事例4：M. I.（ひっこみ思案の女子）初回、4歳1ヵ月。主訴、保育園の保母と話しをしない。家では3語文が出ていた。理解力は2歳後半のレベル。活発な遊びでは、追いかけっこを勧めたが、キャキャと声を出して活発に遊ぶことが、①家の中、②人のいない公園、③人のいる公園、④人の見ている所の順にできるように助言した。このようにして人の前でも楽しめ、自己主張できるようにと考えたのである。

初回から、3ヵ月後、5ヵ月後、7ヵ月後、10ヵ月後、12ヵ月後に面接をした。人の話をじっくり聞くようになり、保母とは挨拶から始まり話しができるようになった。他児とも活発に遊べるようになり、自己主張も強くなった。理解力も年齢相応になってきた。結論：落ち着きの面だけでなく、活発さの面についても、細かい配慮をした方がよさそうである。

参考文献

- Allan, J. (1984) 情緒発達と抱っこ法：赤ちゃんから自閉症児まで 監訳 阿部秀雄、風媒社
 Allan, J. (1987) 抱っこで育つ：心を解きほぐす愛着技法、風媒社
 安藤順夫 (1989) 家庭での簡単な抱っこ遊び、Vol.1.3, No.1 日本抱っこ法協会会報
 Ando, N. (1990) Rebound Holding Therapy: Application of the Holding Therapy for Autistic or Hyperactive Young Children. 12th International Association for Child and Adolescent Psychiatry and Allied Professions at Kyoto, Japan.